

○ヤワラゼニゴケ覚え書 (井上 浩) Hiroshi INOUE: Miscellaneous notes on *Monosolenium* Griffith 国立科学博物館研究報告第9巻2号 (1966 年6月) にゼニゴケ類の新科としてヤワラゼニゴケ科を提唱する論文を発表しておいたが、ここでヤワラゼニゴケに関して二三の点を付記しておきたい。

1. 台湾における産地、現在までにヤワラゼニゴケはインド (アッサム)、中国 (広東)、琉球、日本に自生が知られていたが、先の論文に台湾を追加しておいた。これは、California 大学の Prof. Proskauer の教示によるものであった。私は 1966 年3月に台北の台湾大学を訪ねることができたが、この時、台湾大学の構内でこのヤワラゼニゴケがたくさん方々に自生しているのを見た。台湾大学の Prof. Yang もすでにこれに気付いており、Prof. Proskauer の同定によってこれが *Monosolenium* であることを知っていた。Prof. Proskauer はこの Prof. Yang の標本をもとにして私に教示してくれたものである。いずれにしても台湾産を確認したわけである。なお、本種がハワイに分布することは服部 (東京科博研報 11: 176, 1944) によって記されたが、これは極めて疑問のあるところである。最近、ハワイの苔類を調べているアメリカの H. A. Miller もハワイで本種を確認していない。又、Campbell の書いた (Ann. Bryol. 9: 34-36, 1938) アメリカ California 産は明らかに自生ではなく人為的に持ちこまれたものである。

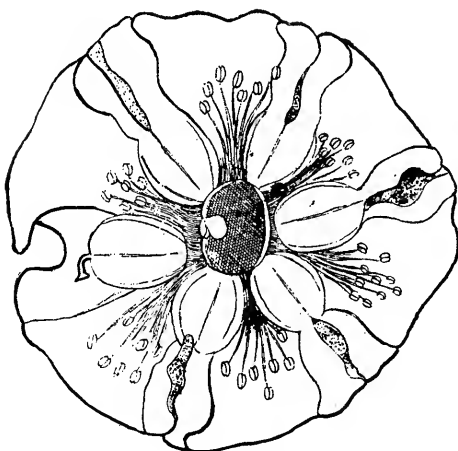


Fig. 1. ヤワラゼニゴケの雌器床 (Griffith 原図)

2. 学名のこと。ヤワラゼニゴケの属名は *Monoselenium* と記されて久しいが、Griffith の記載には *Monosolenium* となっている。この学名の意味は “Pedunculum unisulcatum” で、雌雄の器柄に1溝をもつことからつけられている (実際には1溝のことはごくまれで、2溝であることが多い)。これを、*Monoselenium* としたのは Goebel (Flora 101: 43-97, 1910) が最初で、彼はどうしたのか、*Monoselenium* と *Monosolenium* の二通りを使用している。これ以来ほとんどの苔類学者が *Monoselenium* を使用している。

R. W. Brown の Composition of Scientific words (1956) によると、*Monosolenium* は Mono (1 個) と Solen (パイプ、溝) というギリシャ語の合成されたものである。*Monoselenium* とすると、Selene (ギリシャ語では月を意味する) の変化したものになるので、Griffith の意図した意味にはならなくなる。したがって、*Monosolenium* と記

すのが正しい。

3. Griffith の原図。ここに示した図は Griffith の *Icones Plantarum Asiaticarum* 2, LXXV 図 B からとったヤワラゼニゴケの雌器床の図で、その裏側を示している。奇妙に感ずるのは、これに顕花植物のおしべが書きこまれていることである。Griffith の原稿の下書きが Kew 植物園に保存されていて、その中にはおしべが書いてない正常な図があったという Prof. Proskauce の手紙で、Kew 植物園の Dr. Taylor に Griffith の原図の写真コピーを送ってもらった。しかし、この中にも明らかにおしべが記入されている。Prof. Proskauer はこのことに関して私宛の手紙に、「おそらく画工がかってに加えたもので、Griffith と画工の間がうまく連絡がとれていなかったためであろう」という意見である。雌器床の裏側には白い毛状のりん片がたくさんみられるのが普通であるが、おそらくこれをおしべとして画いたものと思われる。更に、同じ LXXV 図 B には (1) 図として雌器と葉状体の一部の断面図があるが、この葉状体の上にはゼニゴケなどにみられるような無性芽器が画かれているが、これも明らかに作弄的なものである。いずれにしても面白い、どちらかといえばユーモアの感じられる図である。

I published a paper proposing a new family, the Monosoleniaceae of Marchantiales, in Bull. Nat. Sci. Mus. vol. 9 (2). In the present paper, supplementary notes on the locality in Taiwan, orthography of the generic name, and the illustrations by Griffith of *Monosolenium tenerum* were given. In Taiwan this species was found abundantly in the campus of the National Taiwan University. Although the generic name "*Monoselenium*" has been used, this is apparently an orthographic error and it should be "*Monosolenium*", as originally Griffith named it.

(国立科学博物館)

○タカサゴトキンソウ東京に繁殖 (久内 清孝) Kiyotaka HISAUCHI: *Cotula anthemoides* found in Tokyo as an alien

Cotula 属の植物については本誌 18: 3-5 (1952) に原寛氏の記事があり、その中に *Cotula anthemoides* L. (タカサゴトキンソウ) なるものがあるが、このものが、本年東京教育大学の芝生に多数生育していることが伊藤洋氏により認められた。このものは、本邦西部の開港場では知られており、東京でもまれに一二株が見つかったこともあったようだが、教育大校庭に多量に発育して土着している事実は記録に値すると思われる。しかし、いつごろから発生したかは不明であるけれども、ごく近年侵入したことはたしかである。なおこの草は、印度では民間薬の一つとして用いられていたことが、K. R. Kirtikar 氏の *Indian Medicinal Plants* (1918) にかいてあり、リョウマチに外用され、また眼の疾患に用いられるとある。また R. N. Chopra 他二人の版にかかる *Glossary of Indian Medicinal Plants* (1956) にも類似の記事があるが、恐らく前者によったものであろう。その有効成分とか薬理については不詳の域を脱しないから、民間薬程度のものであろう。